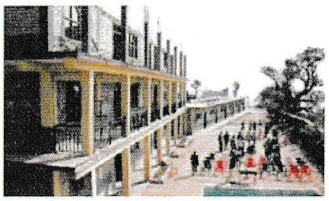
「福岡に恩返し」誓い卒業　ネパールの日本人建設校出身　古里で教師、夢見て前進

2017年03月06日 17時00分

卒業式を終え、恩人の篠隈光彦さん（右）と笑顔で握手するパウデル・アショクさん＝４日、福岡市中央区

写真を見る



福岡博多東ライオンズクラブがネパールの山村に建てた「福岡・ニルマルポカリ学校」

卒業シーズンの春、各地の日本語学校で留学生が学びやを巣立ってゆく。福岡市南区のアジア日本語学院のパウデル・アショクさん（２５）もその一人。学校が不足していたネパールの山村に福岡市の社会奉仕団体が建てた「福岡・ニルマルポカリ学校」の出身だ。同市内の専門学校に進学し、将来は古里の母校で日本語を教えることが夢という。「勉強熱心な学生を福岡に送り出し、恩返ししたい」と決意を新たにしている。

アショクさんはネパール中部の標高約千メートルにある山村ニルマルポカリで育った。村は産業に乏しく、住民は自給自足の生活で大半の子どもも学校に通わず労働にかり出されていた。そうした状況を知ったアジア日本語学院の創設者、篠隈光彦さん（７５）が所属していた福岡博多東ライオンズクラブが１９９９年、現地に学校を建設。学費も支援し、小学生から高校生まで延べ約８００人が学んだ。

アショクさんは日本人の先生から日本の文化などを学び、「おはよう」といった簡単な日本語も覚えた。その後、両親からは韓国への出稼ぎを勧められたが「支援してくれた人たちがいる福岡での勉強に憧れた」と２０１５年１０月、アジア日本語学院に入学した。

福岡では学費や生活費をアルバイトで稼ぎながら学んだ。苦労の連続だったが「学校がしっかり教えてくれたおかげで日本語は上手になった」。ラーメンも好きになり、日本の生活にもすっかりなじんだという。

今後は、地元の学校の教壇に立つために必要な日本語能力の取得に向けて専門学校に通いながら、さらに学びを深めるつもりだ。

４日、ベトナムや中国などの留学生８８人とともに、スーツ姿で卒業式に出席したアショクさんは、緊張した面持ちで卒業証書を受け取った。門出を見届けた篠隈さんは「彼が夢を実現してくれれば、この上ない喜びだ」。アショクさんは「今の私があるのは、福岡の人たちのおかげ。必ず夢を実現させたい」と力を込めた。

＝2017/03/06付 西日本新聞夕刊＝